大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

イライザ・ピンクニーとプランテーションの管理

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 滝野, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002655

イライザ・ピンクニーとプランテーションの管理

滝 野 哲 郎

言語文化学研究（英米言語文化編）
2011・3　第 6 号抜刷
大阪府立大学人間社会学部　言語文化学科

イライザ・ピンクニーとプランテーションの管理

滝 野 哲 郎

18世紀中葉、サウスカロライナ植民地において政治の権力を握っていたのはプランター階級である。プランターたちは、奴隷労働を用いて米やインディゴを栽培するプランテーションを経営し、家父長的な存在としてプランテーションで生活する家族・使用人・奴隷を管理していた。

この植民地にインディゴの栽培を導入したことでその名を知られているのが、イライザ・ルーカス・ピンクニー(1722－1793)である。彼女が栽培に成功したインディゴは、1740年代以降急速に沿岸地域のプランテーションに拡大し、まもなく米につぐ主要な商品作物となって植民地の経済を潤すことになる。イライザはまた、サウスカロライナの有力なピンクニー家の一員として、夫と息子の政治活動を支えたことでも知られている。夫のチャールズ・ピンクニーは植民地の司法長官として活躍し、二人の息子は独立戦争でアメリカ独立のために戦ったのち、長男チャールズ・コーツワースは建国期の政治にかかわって合衆国憲法に署名した一人となり、二男トマスはサウスカロライナ州知事、駐イギリス公使、連邦下院議員を歴任した。イライザは、歴史の表舞台で注目を集めるようなことはなかったが、18世紀サウスカロライナの政治と経済にこのようなかたちで貢献していたのである。[1]

イライザは、人生のほとんどをサウスカロライナで過ごしたが、生まれたのはイギリス領西インド諸島のアンティグア島である。この地のプランター階級に属しイギリス軍将校であったジョージ・ルーカスと妻アンの長女として1722年に生まれた。９歳まで両親のもとで育ち、それから弟や妹とともに教育のためにイギリスに送られ、

５年間、ロンドンの学校で学んだ。イギリス滞在から戻ってしばらくすると、父親は、アンティグアでの奴隷反乱やスペインとの戦争による不穏な情況を懸念し、また経済的安定も求めて、妻と娘二人とともにサウスカロライナへ移りプランテーションの経営を始めた。だが、ここで暮らし始めてまもなく、西インド諸島でスペインとの対立が激化し、父親は、急遽、アンティグア島に戻って任務につくことになる。父親が不在となり、母親は病弱で、弟二人はイギリス留学中であったため、長女のイライザが父親に代わってプランテーションの管理をすることになった。こうして16歳のイライザは、サウスカロライナでプランターとしての生活を始めることになる。[2]

サウスカロライナで暮らし始めたイライザの様子を知るうえで重要な資料となるのが、彼女が書いた手紙である。現在、彼女の手紙は、1739 年から 1746 年、1753 年から 1762 年の部分が公になっている。この最初の部分は、イライザが 16 歳から 23 歳のころのもので、プランターの仕事を始め、インディゴの栽培に成功し、結婚に至るまでの時期にあたる。本稿では、この当時の手紙を手がかりにして、サウスカロライナのプランテーションで暮らし始めたイライザにとって、プランターとしての仕事がどのようなものであったかについて考えてみたい。[3]

1

イライザの家族が暮らしていたのは、サウスカロライナ植民地の中心地チャールズタウンから西方へ「陸路で17マイル、船で６マイル」にあるワプー川沿いのプランテーションである。ここに来て２年後、彼女はこの地が「とても気に入っている」とイギリスの知人に書き送っている。生まれ育ったアンティグアや留学していたロンドンと比べると、「イギリスの方が好きではあるが、西インド諸島よりはこちらの方がはるかによい」。ここは「土地が肥沃で、動物や鳥も数多く」、住人は「全般的に親切で正直であり」、「上流階

級の人たちは上品で礼儀正しい」。ただ「貧困層は世界でもっとも怠惰な人びとである。そうでなければ、これほど豊かな土地であのように惨めな暮らしを送ることにはならないであろう」と指摘する。ときどき訪れるチャールズタウンは「洗練され落ち着いた町」で、イライザは、ここで上流階級の人たちとの交流を楽しんでいた。「ピンクニー夫人とクリーランド夫人は私を気に入ってくれ」、私の訪問を心待ちにしてくれるので、よく彼女たちの家に滞在して町の暮らしを楽しむことがあった。手紙からは、イライザがサウスカロライナという新しい環境に慣れ親しんで生活している様子がうかがえる。ただ、ここに「父もいてくれれば、とてもうれしいのだが」というように、父親の不在についてはやや心細く思っていたかもしれない。[4]

このプランテーションでイライザは日々規則正しい生活を送っている。19 歳のころの手紙によると、日課はつぎのようなものである。「ふつう朝は５時に起き、７時まで読書をする。それから庭園や畑を歩いてまわり、奴隷たちがそれぞれの仕事についているかを確認し、そして朝食をとる」。食事がすめば、「まず１時間音楽に励み、つぎの１時間はこれまで習得してきたことを復習するようにしている。フランス語や速記のようなものは、こうして使わなければ、まったく忘れてしまう」。そのあと、イライザは、妹と奴隷の少女に読み書きを教えている。父の許しがあれば、いずれ彼女たちが、ここで学んだことをほかの奴隷の子どもたちに教えられるようになると考えるのである。昼食（ディナー）がおわると、「ふたたび１時間ほどを音楽に割き、そして午後は暗くなるまで裁縫をし、そのあと就寝のときまで読書と書き物をする」。この屋敷の書斎には「父が残してくれた多くの書物があって」、そこで時間を過ごすことや、「音楽と園芸がとても好きなので、仕事がおわるとあとの時間はそれに費やす」こともある。曜日によっては変化もあって、たとえば月曜日には音楽の先生が来てくれ、火曜日には仲のよい友人と互いの家を訪問するなど、日々几帳面に過ごしている様子がみてとれる。[5]

イライザは、これまで身につけた知識や能力を磨く努力を怠ることなく勤勉な生活を送っているが、こういった生活態度は父親ジョージ・ルーカスの強い影響を受けて形成されたものである。彼は、最初の子であったイライザを、幼いころから期待と関心をもって育て、さまざまなことを教えていた。イライザは、それにこたえて多くを吸収し、利発で知的関心の強い子どもに成長していった。このような彼女の能力と関心は、ロンドンでの学校生活によってさらに高められることになる。当時、イギリス領植民地で暮らす上流階級の人びとは、息子をイギリス本国に送って教育を受けさせたが、娘を送ることはまれであった。ジョージは、息子二人だけでなくイライザと妹もイギリスで教育を受けさせた。そしてイライザの学校を選ぶ際には、おそらく彼女の興味や性格を考慮したのであろう。その学校で彼女は、ただ裁縫・音楽・古典といった当時の女性にとっての素養だけでなく、簿記・ビジネス・数学・歴史・地理学・植物学といった実用的で幅広い知識を身につけることができた。また手紙を書く技術も習得することができた。手紙はビジネスを円滑にすすめるために必要なものであり、ここで学んだことはのちに大いに役立つことになる。イギリス滞在は、イライザにとって、豊かな教養を身につけ才能を伸ばすことができた機会であった。のちに父親への手紙で、「私が与えてもらったもののなかで、教育が何よりも価値ある財産だと思う」と感謝し、これが「これからの人生を幸せなものにしてくれる」と述べている。このように父親から遠く離れてサウスカロライナで暮らすイライザにとって、彼から学んだことや彼から与えられた教育は、生活の指針となるものであった。[6]

2

16 歳からイライザは、父親に代わって 3 か所のプランテーションを管理し、そのさまざまな仕事をこなしていた。イライザが暮らすプランテーションには、ワプー川を見渡す場所に父が祖父から相続

した 600 エーカーの土地があり、彼女はここを毎日みてまわった。あとの２か所は、ワカモー川沿いに約 3000 エーカー、カンビー川沿いに約 1500 エーカーという父が購入した広大な土地で、かなり離れたところにあったので監督人を置いて管理していた。その仕事についてイライザは、「私には３か所のプランテーションにかかわる取引の仕事があって、多くの書類を作成し、人が思う以上にさまざまな用事や気苦労がある」と記している。だが、「朝とても早く起きれば、たくさんの仕事ができることもわかった」ともいう。勤勉な生活を自ら心がけるイライザは、プランテーションの管理においてもその方針を大切にしていたにちがいない。[7]

この３か所のプランテーションでは黒人奴隷が労働力として使われていた。サウスカロライナでは、プランテーションの拡大にともなって黒人奴隷が西インド諸島やアフリカから多数連れて来られるようになり、1720 年代以降、植民地人口の半分以上を占め、とりわけチャールズタウン周辺地域では白人人口をはるかに超えるようになっていた。イライザが暮らすワプー・プランテーションにも「20 人の丈夫な奴隷」がいたが、若いイライザにとって奴隷を扱うのは簡単なことではなかったであろう。1745 年には、奴隷にとって「よい女主人」になるための心構えを記している。「思いやりと優しさをもって扱うこと。十分な衣服・食料・必需品を与えること。病気のときは注意して優しく扱い、悪いことをしたときは叱り、良いことをしたときはほめ、些細な間違いは大目にみること。横暴になったり、不機嫌になったり、苛立ったりしないこと。彼らが心地よく生活できるようにすること」と注意すべき点は数多い。イライザは、このようなことを心がけ、奴隷たちのところにいっては彼らの生活や労働の様子に注意を払っていたのであろう。[8]

プランターの仕事は、プランテーション内のあらゆることにかかわっていたが、イライザがもっとも強い興味を示したのが作物の管理である。「私は、植物の世話がとても好きだ」、そしてそれは「有益な楽しみ」であるという。彼女は、植物にかんする書物を読み、

さまざまな種類の作物を庭園や畑に植えていた。そのころチャールズタウン近郊では、プランターの妻たちが、料理に使う野菜、屋敷を飾る花を庭園で奴隷を使って栽培することはよくあった。イライザも、いろいろな植物を自分の手で育て観察することが好きで、「父もそのことを喜んでくれ、励ましてくれて」、アンティグアからさまざまな種子を送ってくれた。当時、サウスカロライナでは米が主要な換金作物として栽培され、ヨーロッパや西インド諸島に輸出されていた。イライザのプランテーションでも米が栽培されていたが、彼女は、この地で新たに栽培可能な商品作物がないか、父親から送られた種子を試していた。「インディゴ、ショウガ、綿花、アルファルファ、キャッサバを苦労して育ててみたが、インディゴがこれまで植えたもののなかで一番見込みがある」。芽が出ないもの、成長しないものもあったが、いくどか試みるうちによい品種がみつかった。「ここに植えた綿花、ギニアコーン、大半のショウガは、霜でだめになってしまったが、インディゴだけは収穫があった」と記し、さらに「やがてインディゴはたいへん貴重な商品作物になると思う」とその将来性に期待する。たしかに、インディゴは収益の点で有望な作物であった。この時代、イギリスでは繊維産業の隆盛にともなって染料の需要が高まっていたので、これが商品化できれば大きな利益が見込める。そのような思いもあって、おそらく毎日のようにインディゴの成長をみつめていたのであろう。そののち「10キロのインディゴの収穫があり、さらにもっと多くを期待できる」ようになり、そして数年後には商品として取引できる収穫量を得られるまでになった。その後その種子を近隣のプランターに配ると、インディゴ栽培は急速に沿岸地域のプランテーションに拡大していった。そしてインディゴは、それ以降この植民地において米につぐ主要な商品作物となり、独立革命のころには輸出額の３分の１を占めるまでになった。このようにイライザの作物にたいする熱心な取り組みは、父親の助けもあって実を結び、プランテーション経営を安定させ、植民地経済に貢献することになったのである。[9]

プランターとしての仕事には、インディゴ栽培のように成果があることもあったが、日々発生するいろいろな問題に頭を悩ませ、なんとか処理することもあったにちがいない。そのようなとき、彼女にとって精神的な支えとなっていたのが、アンティグアにいる父親の存在であろう。イライザはよく父親に手紙を書き、プランテーションや家族に起こった出来事を報告している。そこに記されるのは、作物の栽培にかんすることはもちろん、「種々の取引にかんすること」、「奴隷が死んだこと」、「舟が転覆し20樽分の米を失ったこと」、「祖母が他界したこと」、「母親を説得して妹を学校に入れたこと」などである。またスペインとの戦争に苦慮する父親を心配し、スペイン軍の攻勢にたいしてジョージア植民地への「軍隊の派遣を議会が請願したこと」を伝え、父が「無事に遠征から戻るのを祈っていること」も記している。娘は父の身を案じ、父は娘に助言や励ましを書き送っていた。イライザにとって、父親は遠く離れたところから彼女を見守る存在であったのだろう。そして父親の期待にこたえてプランテーションを滞りなく維持していることに自負の念を抱いていたにちがいない。「朝早くからたくさんの仕事をこなし、父の役に立てて、自分はとても幸せだ」という。当時のサウスカロライナでは、プランターの不在や死亡にともなって妻がその仕事を引き継ぐことはあったが、イライザはまだ10代でありながら見事にプランテーションの仕事をこなしていた。このようにイライザは、父親を心のよりどころにしてプランターとしての才能を発揮し、そしてそのことに充実感と自信を抱くようになっていたのである。[10]

3

16歳からプランテーションの仕事に携わってきたイライザは、当時であればそろそろ結婚について考えてよい年齢になっていた。18歳のとき、父親が結婚相手の候補として二人の人物の名前を挙げ、イライザの考えをきいてきたことがあった。彼女は父の「親心」に

感謝しつつも、その一人について「たとえその男性がペルーやチリの財宝を手に入れたとしても、尊敬の念を抱けるような結婚相手にはなりえない」と断り、「あと２、３年は結婚については何もしてほしくない」とこたえる。当時、上流階級の若い女性にとって、結婚は大きな関心事であり、結婚を決める際には相手の財産と家柄が大事な条件であったが、イライザはけっして「財産のために犠牲になりたくない」という。19歳のときにも、友人への手紙で、「異性についていえば、私はそのようなことで頭を悩ますことはない」という。この時期のイライザは、作物の栽培そして音楽や書物に興味が向いていたので、たとえ理想的な結婚相手のイメージをもっていたとしても、結婚についてはまだ真剣に考えてはいなかったと推測できる。[11]

このころ、イライザにとって心のよりどころとなる父親は遠方にいたのにたいして、身近なところで彼女がしだいに頼りにするようになったのが、エリザベス・ピンクニーの夫チャールズである。イライザは、サウスカロライナで暮らすようになって以来、エリザベスと親しくしチャールズタウンのピンクニー宅に滞在することがよくあったので、彼女の夫ともしだいに接する機会が増えていった。病弱であったエリザベスは子どもに恵まれず、ちょうど娘のようなイライザの来訪を喜び、イライザも二人に会うのを楽しみにしていた。そのころ、ピンクニー宅に滞在していたエリザベスの姪への手紙には、当時のイライザの気持ちがよくあらわれている。「いつものように、あなたはこの手紙を伯父さんと伯母さんにみせるでしょ。そうすると伯母さんが『イライザはいい子ね。いつもよくがんばっている』という。すると伯父さんが『町に来て、若い人が楽しんでいるようなことをするように言ってあげなさい』という。どうか私もそれを望んでいることを伝えてください」。イライザは、手紙が読まれる場面を想像しつつ、自分の思いを巧みに伝えている。こうしてエリザベスとともにチャールズとの親交もしだいに深まり、彼からは植物や書物について多くのことを教えてもらうようになった。

彼は、豊かな教養と知性の持ち主で、世間からも信用され、イライザにはとても頼りになる男性に思えたにちがいない。[12]

1744 年は、21 歳のイライザにとって実りの多い年であった。これまで手がけてきたインディゴの栽培が順調に進み商品作物として十分な収穫が得られるとともに、ようやく彼女の結婚相手がみつかった。この年の初め病床にあったエリザベスが他界し、その４か月後イライザはチャールズ・ピンクニーと結婚したのである。イライザにとって、24 歳年上のチャールズは、父親のような存在、父親に代わる存在であったのかもしれない。これまで父親にとって「よい娘」であったイライザは、結婚後は夫にとって「よい妻」になることに努める。「自分のすべての行ないが夫への愛と義務に基づき」、「できるかぎり夫に尽くす」ことを決意している。この忠実な妻を目指す思いは、当時の理想とされた女性像に基づいているといえよう。こののちイライザは、夫が政治で多忙になると彼に代わって 10 か所のプランテーションを維持し、そして５年間に４人の子どもを出産しその面倒をみる。イライザはふたたび、男性プランターに代わってプランテーションの管理をすることになったのである。[13]

4

18 世紀のアメリカ南部植民地において、プランターは主人として自らのプランテーションを支配・管理していたが、サウスカロライナでは、女主人がプランテーションの管理において他の植民地と比べより重要な役割を担うことがあったと指摘されている。彼女たちは、日ごろから庭園で植物を栽培し、プランターの不在や死亡のときには、プランテーションの管理・経営の代行を務めることがあった。このように妻（あるいは娘）が管理を一時的に引き継ぐことによって、土地と財産を維持し、後の世代へ継承することができたのである。こういった女性プランターは、プランテーション社会の家父長制を維持するために補完的な役割を果たしていたといえる。イ

ライザも娘として、父親がアンティグアに発ってからプランテーションを管理し作物栽培に力を尽くしたが、もし父親の不在という状況が生じていなければ、彼女の関心や能力は十分に活かされることはなかったかもしれない。彼女は、与えられた機会を活かす能力をもち、父親の理解と支えがあってそれを発揮することができたのである。そして結婚後も、夫の不在にともなって、ふたたびプランターとしての仕事を遂行していくことになる。イライザは、18 世紀のサウスカロライナという男性が主導権を握る社会において、その価値観を揺るがすことなく、代理という立場でプランテーションの管理に取り組みその才能を発揮した。こういったイライザのような女性プランターの存在があったからこそ、このプランテーション社会は家父長制という理念を維持することができたといえよう。[14]

注

1 Elise Pinckney, “Eliza Lucas Pinckney: Biographical Sketch,” *The Letterbook of Eliza Lucas Pinckney: 1739-1762*, ed. Elise Pinckney (Columbia, S.C.: Univ. of South Carolina Press, 1997), xv-xxvi.

2 Carol Walter Ramagosa, “Eliza Lucas Pinckney’s Family in Antigua, 1668-1747,” *South Carolina Historical Magazine* 99 (1998): 246-52.

3 *Letterbook*, 3-71.

4 “To Mrs. Boddicott,” *Letterbook*, 6-8 (2 May 1740); “To Thomas Lucas,” *Letterbook*, 39 (22 May 1742). 現在のチャールストン(Charleston)は、1783年までチャールズタウン(Charles Town)と呼ばれていた。

5 “To Miss Bartlett,” *Letterbook*, 34 (1742).

6 “To George Lucas,” *Letterbook*, xi (1744).

7 “To Mrs. Boddicott,” *Letterbook*, 7 (2 May 1740).

8 *Letterbook*, xvi; Harriott Horry Ravenel, *Eliza Pinckney* (New York: Scribner’s, 1896), 118.

9 S. Max Edelson, “Reproducing Plantation Society: Women and Land in Colonial South Carolina,” *History of the Family* 12 (2007): 138. “To Miss

Bartlett," *Letterbook*, 35 (1742); *Letterbook*, xxv; *Letterbook*, 8 (July 1740); "To My Father," *Letterbook*, 16 (4 June 1741); *Letterbook*, 22 (14 Oct. 1741).

10 *Letterbook*, 5 (March 1740), 13 (23 April 1741), 56 (24 Sept. 1742) ; "To My Father," *Letterbook*, 16 (4 June 1741); "To My Father," *Letterbook*, 58 (10 Feb. 1743); "To Mrs. Boddicott," *Letterbook*, 7 (2 May 1740). Cara Anzilotti, *In the Affairs of the World: Women, Patriarchy and Power in Colonial South Carolina* (Westport, Conn.: Greenwood, 2002), 99.

11 "To Colonel Lucas," *Letterbook*, 5-6 (1740); "To Miss Bartlett," *Letterbook*, 27 (Jan. 1742).

12 "To Miss Bartlett," *Letterbook*, 38 (1741).

13 Ravenel, 115-18.

14 Cara Anzilotti, "Autonomy and the Female Planter in Colonial South Carolina," *Journal of Southern History* 63 (1997): 240, 268; Inge Dornan, "Masterful Women: Colonial Women Slaveholders in the Urban Low Country," *Journal of American Studies* 39 (2005): 385; Edelson, 139.